

令和2年度 卒業生満足度調査結果報告書

〔 群馬医療福祉大学 〕

本調査は毎年実施している「在学生満足度調査」から、令和2年度に実施した卒業見込みの4年生（対象224人、回答202人、回答率90.1%）にかかる調査結果を抽出して報告するものである。

分析にあたっては主な質問事項において「満足していた」と「どちらかという満足していた」を「満足グループ」、「不満であった」と「どちらかという不満であった」を「不満グループ」とし「どちらともいえない」を加えた3分類として比較検討する（項目によっては5分類の場合もある）。

問1 入学決定時の気持であるが「満足」は76%、「不満」は7%となっており、昨年度と比較して満足の割合が10%以上増加し、不満の割合が減少している。

問2 教育理念について知ったのは「入学前から」は65%、「入学後」は33%となっており、昨年度と同様にオープンキャンパスなどによる本学の理念の周知や入学後のフレッシュャーズキャンプなどによってほとんどの学生が理解していることが読み取れる。「今回初めて知った」が昨年度の7%から2%と減少し改善されている。このことから入学以前の時点で、ある程度本学の教育理念が浸透していることが窺える。

問3 教育目標についても問2と同程度の水準96%理解しているが、今回初めて知ったという者も4%と僅かながら存在している。年々改善されているものの、在学期間中の理解促進という意味で今後の検討課題である。

問4 次に、「教育理念」や「教育目標」を感じる機会としては、2019年度は講義を受けている時や、授業で発表をしている時などが多かったが、2020年度は講義を受けている時や単位認定をされるボランティアを行っている時が上位を占めた。授業での発表など、受講時に「教育理念」や「教育目標」を感じることは当然として、ボランティア活動を通じて本学の「教育理念」や「教育目標」を感じ取れるということは、学生へボランティアの意義の浸透と、本学の教員の努力の成果の表れといえよう。

問5 教育に関する取り組みの満足度は「教養教育」、「専門教育」、「基礎演習」、「クラス担任制」など、調査内容のほとんどにおいて、満足と回答した者が70%を超えている。しかし、「キャリア支援・就職支援プログラム」、「資格取得対策講座」については、そ

れぞれ 20%、14%と減少している。これは新型コロナウイルスにより、対面指導・対面授業等がかなわなかったためと思われる。コロナ禍における親身な相談・指導の構築が急がれる。

問6 学生が何に意欲的に取り組んできたかの問いには、「専門的な知識を身につける」と「幅広い教養を身につける」を選んだ学生が多く、「外国語を身につけること」を選んだ学生は少ない。この傾向は昨年度と同様である。

問7 受講してきた授業での不満についての問いには、「不満な授業はない」が最も多くなっている。この傾向は昨年度と同様である。「教員の一方的な授業」の回答者が比較的多いのも、昨年度と同様である。一方で「授業内容に興味を持ってないから」と答えた学生が昨年度より増加している。これも新型コロナウイルスによる遠隔授業の増加により、教科担当者との関係性が希薄化したことで、授業科目に興味を持てなかったと考えられる。また友人同士の学習面における相互に協力する機会の減少も、興味を持ってないと回答した一因と考えられる。

問8 昨年度と同様「専門分野の授業が充実している」、「実験・実習に十分な時間が確保されている」、「資格取得に役立つ」は60%を超えているが、「高校で学んできたこととの結びつきがわかる授業が多い」については34%と低い。これは、本校の特徴である資格取得にかかる専門科目が多いためでもあり、やむを得ないものと考えられる。一方で「外国語教育が充実している」「選択できる授業科目が充実している」の回答割合が、昨年度に引き続き今年度も微増している。今後もカリキュラムの改善を通じた、魅力のある授業を提供していくことが求められる。

問9 昨年度と同様に、本学の教員に関しては「授業の進め方や指導法をよく工夫している」と「教育指導に熱意を持っている」など大半の設問項目において60%以上の学生が高い評価をしている。しかし「授業以外でも教員とコミュニケーションがとりやすい」と回答した学生は、一昨年度が64%、昨年度は71%、今年は62%と一昨年度とほぼ同水準にまで減少している。教員・学生間のコミュニケーションは、学生のモチベーション維持にも影響があるため、コロナ禍にあつて如何にコミュニケーションをとっていくかが課題である。

問10 昨年度と同様に「社会のために行動する力」や「相手の意見を丁寧に聞き内容を正確に理解する力」など多くの設問に対して医療・福祉を学ぶ学生としての基本的なことを本学で身につけてきたと学生は認識している。また、「数式や図表を使って表現・分析する力」や「外国語に関する面」の回答割合が低いことも昨年度と同様である。

なお、今後さらに身につけたい事項としては「コミュニケーション能力」に関するものが昨年度と同様に多い。一方で「目標の達成に向かって取り組み続ける力」、「周囲の状況に配慮して行動する力」、「社会の規範やルールに従って行動する力」などを挙げた学生が昨年引き続き増えている。

問1 1 本学への総合満足度で「入学してよかった」については「満足」は62%と昨年度に比べ3%の微増、「満足していない」が昨年度と同様14%という結果になっている。入学時の「満足」から低下している点は昨年度と同様である。社会へ巣立つ学年にとっては、社会人として身につけておくべき能力の水準に達していないと考える学生が少なくない点も影響していると思われる。

問1 2 所属していた学科への満足度は「満足」が71%で3%の増加、「どちらともいえない」は22%で3%の減少、「不満」は7%で昨年度同様となっている。「どちらともいえない」層を「満足」に僅かではあるが転じることができた。今後とも「どちらともいえない」「不満」をどのようにして「満足」させるかが課題である。

問1 3 本学を後輩や兄弟に進めたいと思うかという設問については「勧めたい」は41%、「どちらともいえない」が37%、「勧めたくない」は22%となっており、昨年度と比較して、「勧めたい」が微減し、「勧めたくない」が増している。本学の総合満足度で「満足」と回答した学生の中で、少なくとも20%以上の卒業生は「勧めたい」を選択していないことが読み取られ、その理由をせいさすることで、今後の教育活動に活かしていくことが必要である。

まとめ

職場や地域社会などで仕事を始めていくことが目前に迫っている中で、総じて卒業年次の学生は、社会人として身につけておくべき能力について、まだまだ足りていないと考えていることが窺える。経済産業省が2006年に提唱した「社会人基礎力」とは、「前に踏み出す力」（主体性、働きかけ力、実行力）、「考え抜く力」（課題発見力、計画力、創造力）、「チームで働く力」（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）の3つの能力（12の能力要素）がある。この中で本学の多くの卒業生は、主体性、実行力、協調性などの社会人基礎力を身につける必要性を感じており、これら今年度の結果は昨年度と比較しても、この傾向がいっそう強く出ている。

2019年度と比較して2020年度の顕著な例として、新型コロナウイルスの蔓延により、教員・学生間のコミュニケーションに関する質問事項の満足度の低下が、今回のアンケートからも浮き彫りになっている。人との接触が制限されている中で、今後どのようにして学生と

のコミュニケーションを維持・向上させていくかが喫緊の課題であり、且つ学生の満足度を高めるキーワードになろう。

本学社会福祉学部では昨年度から1年生全員を対象に「サービス・ラーニングⅠ」の科目を開講した。(2020年度は開設2年目)この科目は大学近隣の地域の様々なフィールドにおける課題解決のために取り組み・企画することを通じて、地域社会の様々な実践に触れて、学生自身の学修の深化とコミュニケーション能力・社会性・協調性・行動力といった社会人基礎力を培うことを目的としている。少しずつではあるが、サービス・ラーニングを昨年受講した学生の中から、地域に出向き地域住民と共同して企画・運営をしている者も出てきている。このことから長期的な視野に立ち、主体性を身に付けていくことが、本学の学生が身につけたいと考えている社会人基礎力の強化にも繋がろう。そのためにも教員・学生の協働による授業内容の点検及び検討、学生アンケートから抽出される検討事項の速やかなるフィードバックなど、PDCAサイクルを機能させ、今後も教育の質向上に努めていく必要がある。